

インドシナ難民の日本語力： 日本社会とのつながりから考える

長谷部 美佳

日本がインドシナ難民の定住許可を閣議で了解したのは1978年。今から40年前のことになる。以後、11,319人の人たちに、インドシナ難民としての立場が認められ、2005年に受け入れが終了した。

インドシナ難民とは、1975年のベトナム戦争終結後に、ベトナムを含むインドシナ三か国（ベトナム、ラオス、カンボジア）での共産主義政権樹立後、故国を脱出した人たちのことである。250万人以上が米国に、カナダに20万人、オーストラリアに18万人、3か国の旧宗主国のフランスに12万人が再定住したという。日本が定住を認めた11,319人はその一部である。11,319人のうち、約76%がベトナム出身者、12%がラオス、残りの12%がカンボジア出身である。

この彼らはどのように日本社会に「統合」されているのか。「雇用」と「言語能力」に注目すると、日本語能力の中でも漢字の読み書きが、雇用状況、特に正規雇用か非正規雇用といった雇用状態に、漢字の読み書きが影響を与えている可能性がある。しかし日本語能力は、必ずしも滞在が長期化すれば向上するものではない。25年以上日本に滞在している人の中でも37%がひらがなしか読めないという回答する調査がある。

第二言語の習得には、忍耐強さとか、継続性、ハードワークなどのほか、モチベーションも重要視されており、特にその中でも言語を使って文化や人々と繋がろうとするというような統合的モチベーションと呼ばれるものの重要性が認められている。

日本で暮らすインドシナ難民にとっては、どうだったのか。日本の学校教育を受ける機会のなかった人たちが、日本語の習得と日本社会の関係をどのように語るか、オーラルヒストリーの中から紹介したい。Mさんという女性の語りの中で日本語の習得について語っている部分がある。

「日本についてから大和のセンターに入ったけど、6か月じゃ十分じゃなくて、右も左もわからないし、センターを出た後、ちゃんと勉強してこなかった。でもドラマとカラオケが好きだから、カラオケに出てくる文字で一生けん命日本語覚えたの！もう生きるのに必死だったから。勉強する時間なんてなかった、とにかく生きるためのお金をもらわなくちゃいけないから、お金のことしか考えてなかった！」

Mさんの日本語は決して理解のしにくいものではなく、会話にも聞き取りにも問題がなかった。彼女はカラオケで日本語の文字を勉強したと語っていた。生きるために必死で日本語を勉強してきた様子がうかがえる。テレビドラマやカラオケで日本語を覚えたいという、彼女の日本文化への興味も、彼女のモチベーションを支えたと言える。日本社会から「排除されたくない」という強い希望が、彼女の日本語を学ぶモチベーションとなったと言えるだろう。とすれば、移住者の日本語習得のモチベーション維持のために、日本人が提供しなければならないのは、包摂されてもいいと思えるような日本社会なのかもしれない。

研究
所概
要

月
例
研
究
報
告

ラン
ゲ
ー
ジ
ラ
ウ
ン
ジ
活
動
報
告

研
究
プ
ロ
ジ
ェ
ク
ト

公
開
講
座
報
告

公
開
講
演
会

研
究
業
績